喫茶店は…！？

天井　愛素

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
喫茶店は…！？

【Ｎコード】
Ｎ３８５２Ｉ

【作者名】
天井　愛素

【あらすじ】
『ここはとある喫茶店。何も変わったことのない喫茶店。のように見える』
ちょっと訳アリの喫茶店でお茶して行きませんか…？

メンバー

『ここはとある喫茶店。何も変わったことのない喫茶店。のように見える』
そう思っていたのは、この喫茶店で働く川島（かわしま）　萩斗（しゅうと）十六歳である。

十六歳っつったら、高校生じゃね？
と思うかもしれないが、萩斗は学校へ行っていない。
そこは作者のやりやすいような設定の一部であり、実際の個人名・団体とは一切関係ないわけで。

さて、この喫茶店の何が変わっているかと申しますと。
お客様は至って普通の人間の方々ばかり。
行列ができていると言う訳でもない。
店の外装も、そこらへんにある喫茶店を思っていただけるのならば大方間違いはない。

変わっているのは、働く人……――つまり従業員だ。

萩斗をはめて五人の従業員がいる。
何が変わっているか…メイド服を着るでもえんび服を着る訳でもなく、そこらへんの従業員なのだが。

その従業員達。
自分の住んでいた地方のなまりが強くて、東京生まれ、東京育ちの萩斗には何を話されているかさっぱり分からないのだ。
ここ最近は慣れて来たのだが。

変なところはもう一つ。

喫茶店のオーナーである「四谷(よつや)さん」（オッサンと呼ばれている）以外は、全員学生なのだ。
みんな学費を稼ぐために住み込みで働いているため、ちょっとした家族でもある。

そんな変わった喫茶店で何も起きない…ハズがない！！

今はお客さんも居なくて暇なので、従業員を紹介することにする。
まずはオーナーの四谷(よつや)さん。
結構一緒に暮らしては居るが、下の名前は未だわからない。
四十代後半のオッサンで、この喫茶店を立ち上げた人。
偉い人みたいなのだが、そこらへんに居るオッサンと変わらないので、そんなに偉そうな人には見えない。

「ふぃー！ただいま！」

「オッサン！オレンジジュースくれ」

カランコロンカランと鳴るはずの鐘がガランゴロゴロ！と勢い良く鳴るくらいにドアが開き、二人の小柄な女の子が入って来た。いや、帰ってきた。

「ふぃー！ただいま！」と言った方が山木(やまき)　雛菊(ひなぎく)ちゃん、小学六年生。
ツインテールの髪型ですごく可愛い女の子だ。だが、どこか解らないが地方のなまりが強い。

「オッサン！オレンジジュースくれ」と言った方は桜沢(さくらざわ)　水蓮(すいれん)ちゃん、中学二年生。

目が大きくて、ボブショートの活発的な髪型の女の子。柔道部に所属しているらしい。こちらも、どこのなまりなのかは解らないが、かなり強烈。

雛菊はランドセルをロッカールームにボフッと放り投げ、水蓮はブレザーを脱ぐとオレンジジュースを一気飲みした。

「痛っ！！お前ら、おっせーぞ！！」

ロッカールームから男の人の大声が飛んできた。

言い放ったのは小出（おで）　荘記（そうき）、高校二年生。萩斗同様に学校へは通っていない。喫茶店では一番の先輩。関西の方の方言を使うっぽい。

そんなメンバーで営む喫茶店。

本当に大丈夫なのか！？

推理…だと！？

午後三時。

子供にとっては丁度おやつの時間。
この時間帯だと、子供を連れた奥様方がやって来る時間だ。

カラコロンカラン。
ドアが開くと小さい男の子と女の子の二人を連れた女の人がやって来た。

「こんにちは」

『いらっしゃいませ』

さっきまで学校の制服と私服だった雛菊も水蓮も、ちゃんと喫茶店の制服（バイト用の服）に着替えていた。
やって来たのは佐竹（さたけ）さんと言う喫茶店の近所に住む若い奥さんだ。
佐竹さんは子供を従業員にあずけてカウンターに座り、オーナーの四谷さんと重々しく話し出した。

「何を話しちょるか気になるがか？」

雛菊は小声で萩斗に話かけた。

「別に気になってないけど。ちょっと重々しいんだよね、空気が」

「あれは間違いなく夫の話じゃき」

首を突っ込んできたのは、さっきまで子供達と遊んでいた水蓮だ。
「最近夫があやしい感じになったとかどうのこうの、そんな話じゃ」
「確かに、そんな空気しちょるな」
「うん。でも僕らが首を突っ込むのはめんどくさいし」
すると、バコンッ！と良い音がして、三人はおぼんで頭を叩かれた。
「何してんねんお前らは。はよ、テーブル拭けや！」
「痛っいなあ！何するがか荘記！」
「さっきのランドセルのお返しや！痛いと思ったら、中にめっちゃ教科書入ってんねんもん！」
「うるさい！今日は五教科あったがね！」
雛菊が歯向って行ってもデコピンされて終わるのだが。
「本当ですか！？ありがとうございます！」
カウンターの方から明るい佐竹さんの声が聞こえて来た。
佐竹さんはペコッとお辞儀をすると、子供を連れて帰ってしまった。
「水蓮。夫の話にしてはずいぶん明るくなかった？」
萩斗が水蓮に訊くと開き直ったようにこう言った。

「あれは、もう一人子供が生まれるとかそう言う話だったんじゃ！」

「おーい、テメーら！ちょっと来い！」

四谷さんがみんなをカウンターに呼びつけた。

「どうしたがか？オッサン」

雛菊が可愛らしさのカケラもないききかたをする。

「実は、最近ここらでストーカー事件があるらしい。だからそれを調べて欲しいとの事だ。佐竹さんが言うには」

出た。

これが喫茶店の変なところ。
探偵でも無いくせに、事件を引き受けては解決しようとする。
従業員からすれば、ありがた迷惑だコノヤロー。
そして仕事が終わるとその事件に取り掛かるのだ。

「つー事で、頑張ろうな！」

「頑張ろうな！じゃないきに！！」

四谷さんがオッサン臭い笑顔を振り撒くと同時に水蓮のパンチが顔にヒットした。

「また、俺等で解決せえっこちゃなぁ？」

荘記の問いに血を垂らしながら頷く四谷さん。

「こんの、無責任オッサンがあ！今日はなにしちょるか！飲み会がか！？」

雛菊は胸ぐらを掴むと大声を張り上げた。

その後も三人からの攻撃を受けた四谷さんのヒットポイントは０になった。

「はあ…もうやだ」

萩斗は溜息をつくしかなかった。

作戦一

午後八時半。

夜になり、外は真っ暗。

ヒットポイントが０になった四谷さんを店に置いて帰り、四人は外で犯人を待った。

近くの家からは家族団欒で夕食を囲む声が聞こえてきている。

「アタシも家族で夕食をかこみちょう気がするがぁ…」

雛菊は涙をうかべつつそう言った。

「そう言われるとおなか減るからやめて」

萩斗は冷たくあしらった。

「やっぱり都会の人は冷とぅと…萩斗には温かさっちゅうもんが無いがか！？」

「それもう、ありきたりに都会にのまれてる人の発言だよ」

「雛菊。あきらめるきに。都会の人はみんなそうじゃ。だから危ないきに」

「もう、フォローでもなんでもないよ、それ」

そんなやりとりをしていると、荘記が何やら作戦を思いついたようだ。

「そうや！こないな作戦どうやろ？」

「何か思いついたがか！？」

「水蓮と雛菊が囮になってストーカーを誘き寄せて、俺らが後ろから捕まえるっちゅう作戦や。どや？なかなかええやろ！？」

張りきって言う荘記の案はすぐに実行された。
単純すぎるだろ…と思ったのは俺だけじゃないだろう。申し訳ないけど。

有言実行。

水蓮と雛菊は何か話しをしながらゆっくりと歩いていた。あやしい人の影は無し。

「本当に来るのかなぁ…」

「大丈夫やって。絶対来る」

萩斗と荘記は後ろの方から電柱に隠れて見ていた。
五分くらい待っただろうか。
結局誰も来ないので、萩斗は二人を呼びに行った。

「雛菊～！水蓮～！」

「この、ストーカー野郎ぅがー！！」

その直後、萩斗の顔に雛菊のパンチがめり込んだ。

「雛菊！！それはストーカーじゃないきに！萩斗じゃけん！」

「あ」

水蓮は雛菊に注意した。その後。遠くから見ていた荘記が心配して叫びながら駆け付けた。

「萩斗ぉー！！」

「お前もかぁー！」

荘記は雛菊にスネを蹴られてしまった。

「雛菊！それ荘記じゃけん！」

「あ」

「あ。じゃねーよ！俺ら何にもしてへんで！？」

荘記はムクっと起き上がると二人に怒鳴った。

こうして作戦一は失敗に終わった。

作戦二

次に作戦の案を出したのは雛菊だった。

「こういうのはどうがか？女の人を狙っちょるちゅー事は、男っちゅーこっちゃろ？だったら酒を使うきに。どうがか？」

何故、男から酒という発想に至ったのかはよくわからなかった。

「酒を…どうするの？」

「まぁ、やってみるのが一番だがね！」

有言実行。（二回目）

萩斗達四人は電柱の後ろに隠れて「飲めます」と張り紙のされている酒瓶を見守っていた。

「って、釣れるかぁぁぁ！こんなもんにひっかかるのはサルとバカなオッサンぐらいだろうが！」

萩斗が怒鳴った後に人影が見えた。

「ほら、人が来ちょー。言う通りだったがね」

「ウソ…マジで？」

人影は千鳥足で確かに酒瓶の方に歩いてくる。

その人影が街灯の下に立った時、顔が照らし出された。

そして、酒瓶を持ち上げてブツブツと何か言った。

「おぅ、コレ飲めんのか？持って帰ろうっと」

酒瓶を拾ったのは言うまでもない。四谷さんだ。

「やっぱりお前がか！？うっすら予想はしちょったがな！」

雛菊のパンチは命中した。

「うわ…酒臭いきに。どこで飲んで来たんじゃ？」

「るっせーなー。子供は早く寝なさい！」

「お前は永遠に眠れや！」

水蓮と荘記と雛菊は、四谷さんにボディーブローをお見舞いすると、四谷さんを縛り上げた。

作戦ニは四谷さん（じゃまだったオッサン）が乱入したため、失敗に終わってしまった。

佐竹さん、すみません。解決しそうにありません。

的な事を星空に向かって謝った萩斗。

キラッと光るながれ星も、今回のバカ達には助けをくれないようだ。

脅迫状？

午前六時。
喫茶店開店の時間である。
モーニングなんちゃら…（忘れた）って言う朝ご飯のサービスがあるために、こんな時間から開いているのだ。
だけど、四谷さんは二日酔いで寝てるし、荘記は学校に行かないのをいい事にぐーたら過ごしている。
女の子二人はのそのそ起きてきて身だしなみを整えていたりするし。
そのため、開店時間には萩斗しか居ないのだ。

カランコロン。
今日一番目のお客さんが入って来た。佐竹さんだ。

「いらっしゃ…あぁ、佐竹さんじゃないですか！どうぞどうぞ！」

「朝早くからすみません…」

二人はお互いに深く頭を下げると本題に入った。

「佐竹さん、あの…事件の事なんですが…」

「何か手がかりはつかめましたか？」

「いいえ。それよりも警察の方に相談された方が…」

「ダメなんです」

佐竹さんはきっぱり言い切ると、ハンドバックから紙を取り出して

見せた。
そこには、あの、新聞の文字が切り取られて張ってあるあの…ガチャガチャしてる奴…あ、「脅迫状」って言うの？それらしき物だった。
そしてこう書いてあった。
「明日午後九時丁度に●●町の神社まで子供を二人連れて来い。連れてこなければ悪い事が起きます。警察には言わないでください」
「何か悪い事ってなんだよ！？しかも最後らへんなんて敬語だよ！？きっとすごくいい人だ！」
萩斗はたまっていたものを吐き出すかのごとく、鋭いツッコミを放った。
「あのぅ、どうしたらいいんですか？」
「ほっといても大丈夫ですよ」
「そんな…何か悪い事が起こったらどうするんですか！？」
佐竹さんは真剣な表情になった。
「（結構真剣に受け止めてるんだなぁ…）」
心の中でそう思い、苦笑いする萩斗に佐竹さんは続けた。
「これは昨日入ってたんです。チラシを取りに郵便受けに行ったらコレが…」

佐竹さんの顔は青白くなっており、すごいげっそりしていた。
「わかりました。この人と取り引きに行ってきます。まかせてください！」
そう言って萩斗は胸をたたいた。
佐竹さんはペコッと頭を下げると家へ帰ってしまった。
「あ。あーッ！また引き受けちゃったー！どうしよう…これじゃあオッサン二号じゃねーか…」
「うるさいきに。静かにしちょれ、まったく」
「すいません。…って雛菊！？水蓮！？荘記！？」
そこにはランドセルを背負った雛菊と制服姿の水蓮とまだ寝ぼけている荘記が居た。
「あ…あのさぁ…」
「全部聞いたきに。お前はオッサン二号か」
「う…気にしてたのに…」
「まぁええわ。どうせ俺らがせんとあかんかったからなぁ」
萩斗は一息ついた。
皆わかってくれてよかった…と。
「（昨日郵便受けに…昨日で明日って事は今日の九時って事じゃな

いか！どうしよう、何か考えなくちゃ！）」

犯人、それで・・・・？

「ただいまー」

学校から女の子二人組みが帰ってきたようだ。
ドサリ。
二人は、かなりボコられている黒服のオジサンを床に叩きつけた。
え？なんで？・・・・というか誰？

「雛菊ちゃ～ん？水蓮～？何コレ？！てか、誰コレ！？」

「感謝するっちゃ萩斗！犯人捕まえたー！」

「え！？マジなの」

「マジ、マジ、大マジ。コイツが女の子追っかけまわしちょったとこを、アタシと水蓮で捕まえちょったんよ～」

ニコニコした顔で話す雛菊を余所目に、床に叩きつけられた犯人らしき男を見た。
反省の色はナシ。
そして既に雛菊と水蓮にもう手を出そうとうずうずしているっぽかった。
まぁ・・・情けない、こんな感じにはなりたくないもんだ・・・と思いつつも、コイツが犯人だと言い張る少女がここに居るんだから、一応は事情聴取とやらをしておこうと思う。残念ながらカツ丼は無い。

「あの・・・ストーカーおよび脅迫状の犯人さんですよ・・・ね？

この馬鹿達がそう思ってアナタを連れてきたって言うんですけど・・・」

「誰が馬鹿っ・・・」と言いかけた二人を遮るように犯人はきょとんとして

「え？確かにストーカーは俺だけど・・・脅迫状なんて知らないぜ俺ぁ・・・」

と言った。

その直後にオジサンは二人の少女にボコボコにされて水蓮と雛菊がやるはずだった皿洗いをさせられていた。

どうしよう・・・今日の九時までに子供用意できるかな？

勘違い

『じゃーんけーんぽん！』

「えぇ！？」

「はぁ・・・？」

●●町へ行く子供は結局、萩斗と水蓮になった。

囮として萩斗と水蓮が乗り込み、その後に雛菊と荘記が犯人を捕まえると言う第一回目から全く反省されていない作戦で行く事にした。

八時五十五分。

九時まで後五分あるが、四人は行動を開始した。

囮チームはもう●●町の指定されていた神社へと来ていた。

「男だけ連れて来いって書いてなかったか？」

すごく低い声の男が目の前まで来ると静かにそうしゃべった。

怖い・・・逃げ出したい・・・。

生憎、電灯は犯人を照らしてくれず、そして犯人の顔は暗くて全然見えない最悪のパターンだった。

体格は大男、筋肉質でがっちりしている。

男が言うには「男だけ連れて来い」つまり水蓮は邪魔、と言う事だろう。

「まぁ・・・いっか。どうせ雑用とかだろうけどな。少年、早く来い！」

そう言って水蓮の腕を犯人は引っ張った。

『（はぁっ！？）』

二人は心の中で驚いた。
きっと水蓮を男だと思ったのだろう、二人ともショートカットとはいえ、柔道部の筋肉質、そしてジャージ姿をなめてはいけないようだ。しかも暗闇で顔ははっきり見えないらしい。

「（オイ、コラ、待てよォォォォ！）」

水蓮は心の怒りを頑張って抑えていた。

一方その頃、草むらに隠れて様子を見ていた捕獲チームの二人。

「す・・・水蓮が男やて！ぶはははは！」

「しょうがないっちゃ・・・ぷ・・・ぷはははは！」

隠れて大爆笑をしていた。
三人が移動を始めたので、笑いをこらえながら後をついて行った。

最終的には

『（手の自由が利かないと不便なんだな・・・）』

萩斗も水蓮も手を縛られて正座させられていた。
場所は海の近くの工場だ、磯の匂いがする。
犯人に訊いた所、これから外国の船が来て僕らを売り飛ばすらしい。

「すいません。これからぼっ・・・私達はどうすればいいんですか？」

すっかり水蓮と萩斗の性転換は行われていた。
萩斗は少女だと思われているので傷をつけたくなかったのか、油断したのか、犯人は縄をゆるく結んでくれたのだ。

「お前ら、名前は？」

ゆっくりと静かな声で問われた。

「えっと～・・・私がスミレでこの男の子はミズ君で～す」

そう萩斗が裏声で言うと水蓮に思いっきり睨まれた。

「（ネーミングセンス・・・ゼロじゃき）」

「（考える暇なかったんだよボケが、だったら水蓮が答えればよかったのに！）」

その頃、捕獲チームの二人は『ある物』をセットしていた。

さあ、これからだ。
萩斗が簡単に縄を解くと水蓮の縄も解いてやった。
どうやって犯人をボコるかにかかっているのだ。
捕獲チームは頼りないし、第一この犯人の仲間にやられているかもしれない。
そうなっていると仮定して、やっぱり囮チームがこの男をボコるしかない・・・。

「水蓮・・・準備いいかい？」

「ばっちりじゃき」

「せーので行く？」

「いっせーのーせじゃろ？」

「は？せーのだよ。しょうもない戦いはやめようよ」

「んじゃせーのじゃきにな！」

『せーのっ！・・・・！？』

解決したのか・・・？

『あ・・・足しびれてるぅぅぅぅぅ！？』

正座している事をすっかり忘れていた馬鹿な囚達。
立ち上がってしまったのでもう取り返しがつかない。
だが、足がしびれて・・・もうどうにも・・・。

「ちょ、お前ら動くなっつったろーが！でもって何してんのぉぉぉ！？」

犯人には見事に気付かれてしまい、しかもツッコミまでいれられてしまった。

「いや・・・あの・・・ちょっとですね・・・」

「足しびれたってか！？」

「本当、タスケテください！これこそは本当、どーにも！本当！」

「知らねーよ！しかもちょっと涙目になってるじゃねーか！可哀想だな、オイ！」

犯人が萩斗にツッコんだとたん、萩斗はニタっと笑ってこう言った。

「お前がな・・・！」

「・・・何！？」

いつの間にか犯人の足元にしゃがんでいた水蓮。
勢い良く立ち上がって、犯人に思いっきり頭突きした。
その後も背負い投げとか技を決めていた。
萩斗が拍手をして「わーすごいすごい（棒読み）」と言っていると、
犯人は気絶した。

「はぁ・・・足しびれてるよ～まだ」

そう言って二人は工場を出た。

ピッ・・・・・・・・・・ドオオオオオオオン！！！！！

「いやぁ、すまんことしちょ～」

雛菊と荘記はてへっと笑ってみせた。

「あー、ギャグだからって笑ってすまされる事じゃないよ？お二人さん」

ベットには包帯ぐるぐる巻きの萩斗と水蓮。

捕獲チームの二人は工場の出口に地雷を七個セットしていたそうだ。
その一個をたまたま萩斗が踏んでしまって、工場は爆発した。
犯人は爆発に巻き込まれ死亡。

「あれ？ちょっと待ってよ・・・」

そう言ったのは萩斗だった。

「爆発により死亡って事は爆発物を持ち込んだ二人は殺人しゃ・・・」

「あ～アカンわ～。お客様がぁ・・・」

荘記がしらばっくれ

「大丈夫。・・・せーとーぼーえーになっちょっとよ」

雛菊が汗だくで言い訳をし

「俺は知らねーよ」

四谷さんが包帯ぐるぐる巻きになりベットに寝ていた。

『なんでお前も巻き込まれてるんだよ！？』

四人の心が一つになった瞬間だった。

解決したのか・・・？（後書き）

どうも、天井です！
やっとやりたい放題が終わりました（笑）
片方で堅苦しい事やってると片方では自由奔放にやりたいという自由人なもんでして、はい。
これからはもうちょっと卓球の方の物語を重ねていきたいと思います！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3852i/

喫茶店は…！？

2011年1月18日02時59分発行